

## 5 観賞用鶏にみられたマレック病の一症例

群馬県家畜衛生研究所

○水野剛志

2014年11月12日、観賞用鶏約100羽を飼養する農場から脚弱症状を呈する鶏がいるとの通報があった。鶏はプレハブ内の縦2～3段、横3列の区画があるケージ内で1区画4～8羽が飼養されていた。立入り時、目立った脚弱症状や神経症状はみられなかったが、起立時に脚を開いてややX脚姿勢をとり、関節が屈曲したまま起立状態を維持する鶏が多数認められた。症状を呈していた3羽が病性鑑定に供され、本症例はそのうちの1羽。ワクチン接種歴はなし。剖検所見では、盲腸漿膜面に米粒大～小豆大の白色斑がみられ、応対する粘膜面は内腔に向かって突出し盲腸便が固着していた。小腸遊離部と結腸に線虫の寄生が認められた。組織所見では、大脳、小脳および視葉の灰白質においてリンパ球様腫瘍細胞を主体とした囲管性細胞浸潤が散見された。腫瘍細胞は豊富な細胞質を持ち、核は円形～楕円形で大小不同であった。腎臓の皮質の尿細管間質においても、同様の腫瘍細胞の浸潤が多発性に認められた。また、同様の腫瘍細胞の浸潤は肝臓の小葉間結合織、肺の二次気管支の粘膜固有層と気管支周囲においても軽度に見られた。皮膚では一部の羽包上皮の角質層直下において、好塩基性、full型の核内封入体が認められた。また、真皮の血管周囲や神経細胞周囲においてリンパ球様腫瘍細胞の集簇巣が散見された。盲腸の肉眼で漿膜面に白色斑がみられた部位では、粘膜面に変性した偽好酸球や細胞退廃物が塊状になって付着しており、盲腸の粘膜固有層および盲腸内容にコクシジウムオーシストが散見された。大脳、小脳、視葉および腎臓について抗CD3家兎血清（DAKO社）を用いた免疫組織化学的検査を実施し、リンパ球様腫瘍細胞に陽性反応が認められた。以上の検査結果から、本症例をマレック病と診断した。